

**平 岩 種 治 郎**  
(1880~1952/棚尾)



1 おいたちと人柄

明治維新により封建的な拘束が撤廃され、民間企業の興隆が始まった明治 13 年 (1880)、鍛冶屋平岩幸左衛門の長男として種治郎は棚尾村字東川 (現 碧南市棚尾本町) に生まれた。

平岩家は、初代幸七 (1784 ~ 1849) が文化 5 年 (1808)、24 歳のときに鍛冶屋を創業し、種治郎で 5 代目である。父幸左衛門は典型的な火造り鍛冶屋で、村では「鍛冶幸」と呼ばれていた。性格は気短だが、気っぷがよく、質素で物を大事にし、信心深い人であった。

2 先輩に六代目永坂<sup>もくべえ</sup>壱兵衛、友人に藤井達吉が

種治郎が入った棚尾学校は、妙福寺 (毘沙門さん) にあり、1 つ年下に総合芸術家となった藤井達吉がいた。小学校の 4 年間種治郎と達吉は友達としてよく遊んだ。友を選ぶなら「学者か知者を選び、悪人は遠ざけよ」との父の教えにより、同郷の先輩で同志社に学び漢詩に通じたインテリ瓦師六代目永坂壱兵衛のもとで英語を習った。また、学校を終わってからも妙福寺のお手伝いをし、住職からもお茶の作法や囲碁を会得した。このことが後の人間形成に役立った。

種治郎は若い頃、村の人達から「ゴミだめに鶴が舞い降りた」と噂されたほどで、緻密な頭脳で、人の意見をよく聞き、ことにあたっては用意周到、しかも先見性があった。

3 鍛冶幸から平岩鉄工所へ

とにかく機械いじりが好きであった種治郎は、12 歳で父の工場に入り、農機具、船くぎを作った。そして父を助け、手回し式の旋盤を導入した。

近代産業が芽吹き始めた明治 30 年 (1897)、石油ガス発動機を製造し、知多郡の機屋へ納入し、この地方の産業改革に一役果たした。

鍛冶幸から「平岩鉄工所」となり、種治郎の努力により明治末には職人 25 人、年生産額 2 万 5 千円の中堅工場となった。

4 国産初、目を見張るでき栄えの毛織機を發明

大正 3 年 (1914)、亀崎の竹内昇亀から四幅毛織機製造の依頼があった。戦争で外国からの毛織機が途絶えた今こそ国産化のチャンスであると考え、大阪からジョージ・ホジソン式の織機を借り、解体、研究し国産毛織機の製作に挑んだ。その後、更に改良を加えるため、ドイツ製のションヘル式織機を借りて、日本人女工に合い、能率のよい純日本式の毛織機を完成させた。ときに大正 5 年 (1916) 3 月であった。

その後も改良を続け、翌大正 6 年 10 月、亀崎の竹内工場で、経て 60 双糸、緯 53 単糸の紺サージ地の試し織りをした。運転は円滑で綾目も申し分なく、専門家や機業界が目を見張るでき映えであった。

すぐに 124 台もの注文がまとまり、織り上がった製品は、大阪の毛織り輸入商社最大の芝川商店が買い取る契約も結ばれた。

## 5 日本の毛織物工業の飛躍的發展に貢献した平岩製織機

平岩製の国産四幅毛織機は、当時 1 台 1600 円で一宮を中心にした尾西地方や岐阜・大阪方面の機屋に設置された。

その後も改良が続けられ、昭和 24 年（1949）には回転数毎分 124 回の高速毛織機が完成した。

平岩製毛織機は、我が国を代表する毛織工場である日本毛織、東洋紡績、東亜紡績等にも納められ、日本の毛織物工業の飛躍的發展に貢献した。また、有名ブランドの御幸テックス、長大テックスを生んだ。その結果、毛織機製造の国内シェアは 75 %にもなった。

更に、アメリカやソ連、東南アジア、中近東、アフリカ等 22 カ国へ輸出されている。

## 6 平岩鉄工所青年学校を開設

種治郎は推されて、昭和 5 年棚尾町会議員に当選、昭和 13 年（1938）には学務委員となった。その翌年、従業員の知識技能の向上が、新しい機械製造の基盤を作ると考え、平岩鉄工所青年学校を開設、校長に就任。青少年の教育にあたった。ここで学んだ人達によって西三河南部の鉄工業が発展した。

## 7 三笠宮殿下のご来臨、地域の経済界の中心に

戦後ようやく産業界が明るさを取り戻し始めた昭和 24 年（1949）に碧南商工会議所が設立され、初代の会頭となった。その子慶一も第三代会頭に就任し、平岩家はこの地方の経済界の重鎮となった。（平成 22 年、慶一の子、統一郎も会頭に就任）昭和 25 年（1950）に株式会社となり、従業員は一時 350 人余にもなった。

またその年の 5 月、三笠宮崇仁親王殿下が平岩鉄工所に来臨された。当時 72 歳になっていた種治郎だが、息子 34 歳の慶一は後にそのときの心境を「私は父と共に工場のご案内をさせていただいた。光栄ではあったが、とても緊張した一日であった」と述べている。

## 8 地域にも貢献

種治郎は戦時中、軍からの会社合併を断ったり、三河地震のあと警察からお宮の木を切っても早く復旧せよとの話を断った信念の人でもある。

また、町づくりにも協力し、大正 13 年（1924）の棚尾町発足に際し、毘沙門天の南に 70 尺（約 21 メートル）の火の見櫓と棚尾小学校にパッキングガム宮殿の門を模した門扉を寄贈した。これらは実に見事な出来で、戦時中の供出も免れ、今も残されている。

このように国産第一号の毛織機の発明者として、また、地域産業の発展と地域文化の発展に大きな貢献を残し、昭和 27 年（1952）10 月、72 年の生涯を閉じた。

### ◆もっと知りたいなら

- ・『平岩種治郎』（平 13 季刊誌『みどり』石川繁治）
- ・『碧南の風』（平 13 平岩慶一）